JASE
現代性教育研究ジャーナル
MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2017年
No. 72
2017年3月15日（毎月15日）発行

日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 中山博邦
© JASE. 2017 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

結婚しない、セックスしない若者たち……1
AOFS Japanシンポジウム報告……11
もっと知りたい男子の性⑱……16
Dr.上村茂仁の性の悩みクリニック⑫……18
今月のブックガイド……19
JASEインフォメーション……20

結婚しない、セックスしない若者たち
――「第８回男女の生活と意識に関する調査」結果から――

一般社団法人日本家族計画協会理事長
北村 邦夫

2002年から２年毎に実施している「男女の生活と意識に関する調査」の第８回の結果がまとまった。

この調査は、日本家族計画協会（Japan Family Planning Association、以下「JFPA」）が公益目的支出計画事業の一環として行っているもので、本稿では、「結婚しない、セックスしない若者たち」に注目して、調査の成果を報告したい。

◆ 調査の方法

「第８回男女の生活と意識に関する調査」を行うにあたっては、個人のプライバシーに十分留意しつつ、層化二段無作為抽出法（注）という調査手法を用い、現在満16歳から49歳の国民男女3,000人を対象として、2016年10月13日（木）～11月22日（火）に実施した。今回の調査では、回収数を増やす目的で、一部、対象者からの郵送による返答も可とした。その結果、長期不在、転居、住居不明を除いた2,700人のうちの有効回答数は1,263人（男性587人、女性676人）、有効回答率は46.8%であった（表１）。回答者の平均年齢は34.95歳（男性34.35歳　女性35.46歳）。なお、本調査を実施するにあたっては、一般社団法人新情報センター・研究倫理審査委員会に申請書を提出し、2016年９月５日に開催された同委員会において承認されている。

表１「男女の生活と意識に関する調査」

		有効回答数（回答率）
第1回	2002年	1,572人（52.4%）
第2回	2004年	1,580人（52.7%）
第3回	2006年	1,409人（51.9%）
第4回	2008年	1,468人（54.1%）
第5回	2010年	1,540人（57.2%）
第6回	2012年	1,306人（48.6%）
第7回	2014年	1,134人（42.4%）
第8回	2016年	1,263人（46.8%）

層化二段無作為抽出法で抽出した16歳～49歳男女3,000人のうち長期不在、転居、住居不明を除いた2,700人を有効回答とした。第１回は10月31日から12月4日、第２回は10月28日から11月28日、第３回11月２日から11月26日、第４回、第５回は９月11日から28日、第６回は９月13日から30日、第７回は９月11日から９月28日、第８回は10月13日から11月22日に実施。

図１　（男女）回答者の性交年齢累積率　（%）

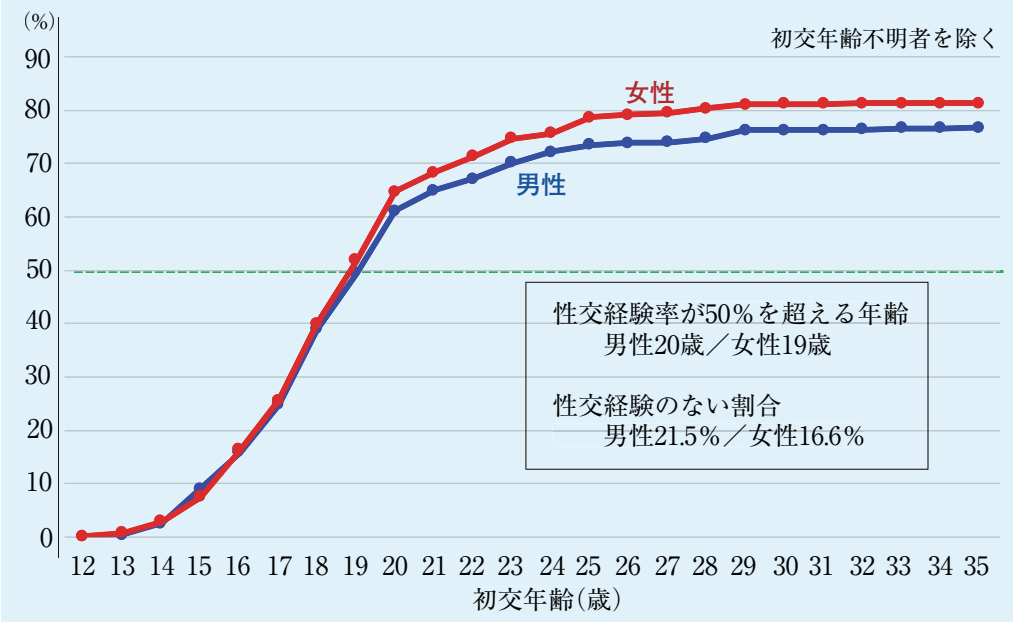


表２　初交経験年齢累積率が下記の数字を超える年齢は？

		30%	50%	70%
男　性	2002年	18歳	20歳	23歳
	2004年	18歳	19歳	23歳
	2006年	18歳	19歳	21歳
	2008年	18歳	19歳	21歳
	2010年	18歳	19歳	21歳
	2012年	18歳	19歳	21歳
	2014年	18歳	20歳	24歳
	2016年	18歳	20歳	23歳
女　性	2002年	19歳	20歳	25歳
	2004年	18歳	20歳	22歳
	2006年	18歳	19歳	22歳
	2008年	18歳	19歳	21歳
	2010年	18歳	19歳	22歳
	2012年	18歳	19歳	22歳
	2014年	18歳	19歳	22歳
	2016年	18歳	19歳	22歳

◆ トピックス１

性交経験率が 50% を超えるのは 男性 20 歳、女性 19 歳

過去８回行われた調査について、初交年齢から累積経験率をみた。第８回（2016 年）調査では、15 歳での累積経験率が、男性が女性を僅かに上回っているものの、その後はいずれも女性の乗り越え現象が起こっている（図１）。初交年齢の累積率が 50% を超えるのは男性では 20 歳だが、女性は 19 歳、70% 超えは男性 23 歳、女性 22 歳となっている（表２）。

16 歳から 49 歳の調査対象者のうち、性交経験のない割合は、男性 21.5%、女性 16.6%。

◆ トピックス２

親や家庭環境が性交開始年齢に影響

世界では広く包括的性教育（Comprehensive Sexuality Education）の重要性が話題になっている。これは禁欲教育（Abstinence Only Education）に対峙する言葉である。要約すれば、「性交開始年齢を遅らせることができる」「仮に、性交を開始するならば、避妊と性感染症予防を考慮した責任ある行動がとれる」となる。

性交開始年齢を早める要因としては、「親と子のコミュニケーション」の重要性が示唆される。統計的に有意な差をもって性交開始年齢を早めたのは、（母親の評価）「嫌い、うっとうしい」、（10 歳ぐらいの頃まで、多くの同性の友だちと一緒になって外で）「遊んだ」など。統計的な有意差はないものの、（父親の評価）「嫌い、うっとうしい」、（中学生の頃）「家庭に対して楽しくなかった」「普段、親と話をしなかった」「朝食を食べなかった」などで性交開始年齢を早める傾向にあった。

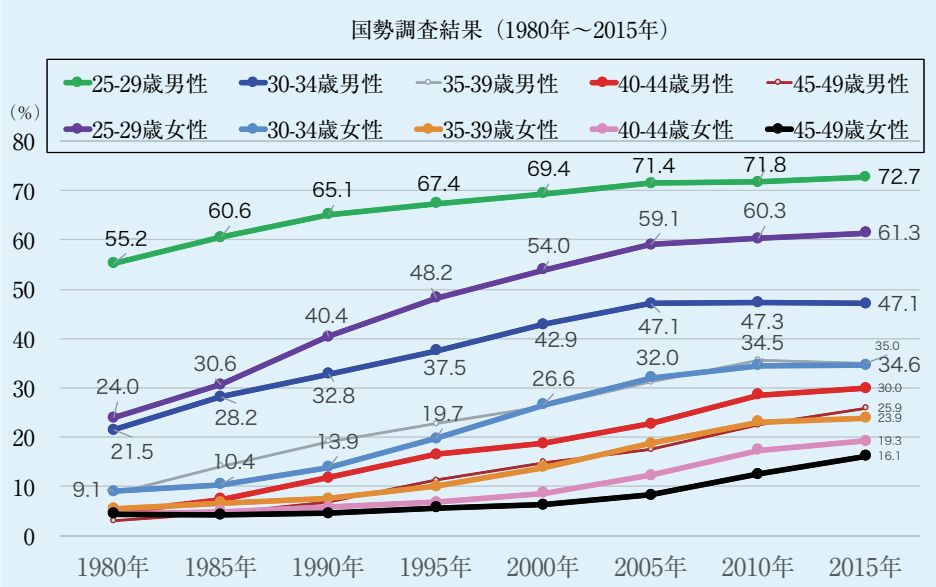
「あなたが行動や考えで影響を受けたのは誰（何）ですか」とのクロス集計では、性交開始年齢が最も早かったのが「インターネット」からで 17.6 歳。「インターネット」からと回答した者との比較では、「親」

表３　これまでの日常生活や考え方と性交開始年齢との関係

**p<0.01　*p<0.05

		件数	平均	分散	標準偏差	p値
	全体	904	19.0	10.0	3.2	
母親に対して	産んで育ててくれて、感謝している	806	19.0	9.7	3.1	0.04
	嫌い、うっとうしい	17	18.2	4.6	2.1	
父親に対して	産んで育ててくれて、感謝している	692	19.1	9.6	3.1	0.11
	嫌い、うっとうしい	27	18.7	6.5	2.6	
あなたは１０歳ぐらいの頃まで、多くの同性の友だちと一緒になって外で遊びましたか。（統合）	遊んだ	861	18.9	10.1	3.2	0.02
	遊ばなかった	39	19.1	5.8	2.4	
あなたは中学生の頃、家庭に対してどう感じていましたか。（統合）	楽しかった	660	19.1	10.1	3.2	0.18
	楽しくなかった	242	18.5	9.2	3.0	
あなたは、普段、親と話をしていましたか。（統合）	話をした	811	19.0	9.7	3.1	0.28
	話をしなかった	92	18.1	10.8	3.3	
あなたは中学生の頃、朝食を食べてましたか。（統合）	食べた	771	19.1	10.0	3.2	0.25
	食べなかった	130	18.2	9.1	3.0	
あなたが生活する上で、あなたの行動や考え方について、最も影響を受けたのは誰（何）ですか。（インターネットに影響を受けたと回答した者との比較）	インターネット	8	17.6	4.0	2.0	
	親	546	19.2	9.7	3.1	0.02
	祖父母	33	19.3	10.8	3.3	0.02
	きょうだい	41	18.4	7.0	2.6	0.12
	それ以外の親族	8	19.8	14.5	3.8	0.06
	近隣の人々	11	18.7	11.8	3.4	0.06
	学校	28	18.5	10.4	3.2	0.03
	友人・先輩	168	18.1	10.4	3.2	0.01
	マスコミ	10	19.0	6.2	2.5	0.26
	宗教	8	20.1	25.0	5.0	0.01
	この中にはない	40	19.1	7.4	2.7	0.11

図２　未婚率の推移



「祖父母」「学校」「友人・先輩」「宗教」で性交開始年齢が概して遅くなることがわかった（表３）。

◆ トピックス３

未婚者（独身者）の特徴を探る

少子化の問題点は、未婚化が大きく影響していると言われている。事実、国勢調査結果から未婚率の年次推移をみると、25 歳から 29 歳の男性では 1980 年が 55.2% であったものの 2015 年には 72.7% と 17.5 ポイント、女性は 24.0% が 61.3% となるなど 37.3 ポイントも高くなっている。

この 10 年ほど、30 歳から 34 歳では男女とも上げ止まりの感があるが、それでも 2015 年では男性 47.1%、女性 34. 6%（図２）。第８回調査の回答者をみても、「未婚」は全体の 41.7%（男性 49.7%、女性 34.8%）。男女ともに 35 歳を超えると未婚者割合が低下するものの、35 ～ 39 歳で男性 24.7%・女性 12.5%、40 ～ 44 歳で男性 31.1%・女性 13.1%、45 ～ 49 歳では男性 21.2%・女性 15.0% で、国勢調査結果と比べて多少の違いがあるが、高率であることには変わりがない。

社会保障・人口問題研究所が 2016 年 9 月に「第 15

回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）」結果を発表した。中でも、18歳から34歳の男女について「独身者調査」が行われていることから、本調査でも、18歳から34歳に絞り込んで、未婚者（独身者）の特徴を探った。

まず結婚の意思については「いずれ結婚したい」は全体の83.9%（男性82.3%、女性85.7%）、「結婚するつもりはない」8.5%（男性8.8%、女性8.1%）という結果であった。前述の「独身者調査」と比べて、「いずれ結婚したい」「結婚するつもりはない」は低く、「わからない」が高めに出ていた（表4）。これを18～24歳、25～29歳、30～34歳の3区分でみると、30～34歳男性の15.2%、女性の19.4%が「結婚するつもりはない」と回答している。

それぞれの年齢について、結婚の利点を聞くと、男女差が顕著なのは「経済的に余裕がもてる」と「性的な充足が得られる」。「経済的に余裕がもてる」について、30～34歳男性では15.2%が「利点がある」としているに過ぎないが、女性では61.1%が「利点がある」と考えている。「性的な充足が得られる」ことを「利点がある」としたのは男性が多く、25～29歳男性では56.1%が、女性は34.2%であった（図3-1、3-2）。

結婚の利点については、「とても利点がある」「ある程度利点がある」「どちらともいえない」「あまり利点はない」「まったく利点はない」の5段階に分けて、「とても利点がある」を5、「まったく利点はない」を1として選んでもらった。これを評価点として、18～34歳の未婚者と既婚（初婚＋再婚）者について男女別に平均点を算出した。未婚者の評価点が既婚者より高かったのは、18～24歳の男性8項目、女性2項目、25～29歳の男性3項目、女性4項目であったが、30～34歳の男女ではすべての項目で独身者の評価点が既婚者を下回っていた。若い世代での結婚への期待に比べて、30～34歳の未婚者の結婚への期待が如何に低いかを物語っている（次ページ表5）。

18歳から34歳の未婚男女に、「子どもを持つにあたって不安に思っていることは何か」を聞くと、男女ともに「経済的なこと」を第一に挙げ、次いで男性では「自分やパートナーの時間がなくなる」「仕事に関すること」「出産や子育てにともなう心身の負担」「親になることに自信がない」を、女性では「出産や子育てにともなう心身の負担」「仕事に関すること」「保育

表4　18歳～34歳の未婚者の結婚の意思

（%）

	全体	男性	女性	男性*	女性*
合計	342	181	161	2,706	2,570
今すぐにでもしたい	10.2	8.8	11.8		
結婚したい相手が見つかればしたい	29.8	27.6	32.3		
いずれはしたい	43.9	45.9	41.6		
するつもりはない	8.5	8.8	8.1		
わからない	6.7	7.2	6.2		
無回答	0.9	1.7	0.0		
いずれは結婚したい	83.9	82.3	85.7	85.7	89.3
結婚するつもりはない	8.5	8.8	8.1	12.0	8.0
わからない	6.7	7.2	6.2	2.3	2.7
無回答	0.9	1.7	0.0	-	-

＊部分は、「第15回出生動向基本調査：第1部　独身者調査の概要、2015年」による

図3-1　結婚の利点（抜粋）

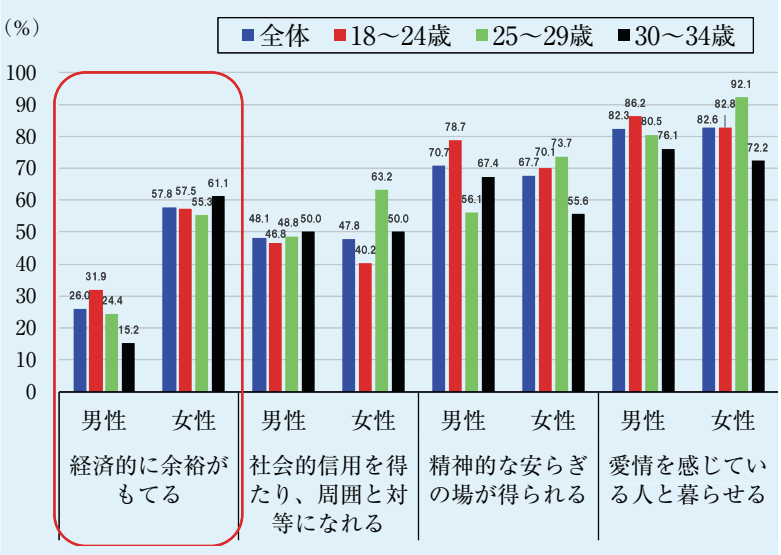


図3-2　結婚の利点（抜粋）

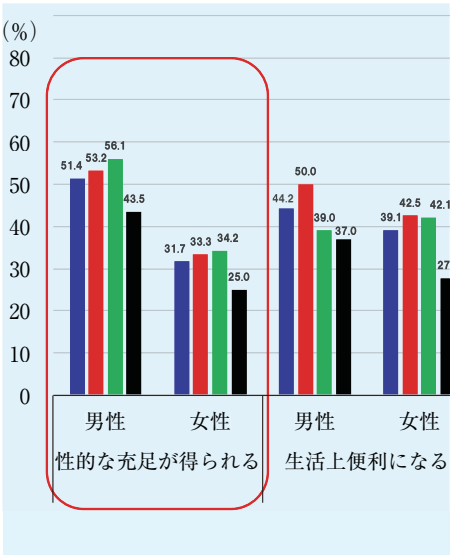


表５　結婚の利点の評価点

・とても利点がある（５）・ある程度利点がある（４）・どちらともいえない（３）
・あまり利点はない（２）・まったく利点はない（１）

	18～24歳		25～29歳		30～34歳	
	未婚男性	既婚男性	未婚男性	既婚男性	未婚男性	既婚男性
経済的に余裕がもてる	3.11	2.75	2.90	2.86	2.73	3.28
社会的信用を得たり、周囲と対等になれる	3.38	2.75	3.46	3.23	3.40	3.42
精神的な安らぎの場が得られる	4.25	3.50	3.71	4.27	3.89	4.33
愛情を感じている人と暮らせる	4.37	4.00	4.12	4.64	4.00	4.58
自分の子どもや家族をもてる	4.34	4.00	4.12	4.73	4.07	4.53
性的な充足が得られる	3.57	3.75	3.54	3.55	3.50	3.61
生活上便利になる	3.61	3.25	3.24	3.77	3.33	3.64
親から独立できる	3.65	3.50	3.68	3.45	3.40	3.42
親を安心させたり周囲の期待にこたえられる	3.85	3.50	4.07	4.09	3.80	4.00

	未婚女性	既婚女性	未婚女性	既婚女性	未婚女性	既婚女性
経済的に余裕がもてる	3.63	3.00	3.53	3.43	3.64	3.65
社会的信用を得たり、周囲と対等になれる	3.26	2.88	3.63	3.53	3.44	3.63
精神的な安らぎの場が得られる	4.04	4.38	3.97	4.30	3.53	4.19
愛情を感じている人と暮らせる	4.32	4.88	4.24	4.47	3.86	4.32
自分の子どもや家族をもてる	4.32	4.75	4.32	4.70	4.00	4.68
性的な充足が得られる	3.21	4.13	3.29	3.50	3.14	3.35
生活上便利になる	3.48	3.63	3.37	3.73	3.14	3.54
親から独立できる	3.44	3.63	3.74	3.33	3.49	3.60
親を安心させたり周囲の期待にこたえられる	3.67	3.88	4.16	4.13	4.00	4.00

表６　（18 歳～ 34 歳の未婚男女）子どもをもつにあたり、不安に思う（思っている）ことは何ですか。お子さんをおもちの方は、お子さんがいて現在不安に思っていることやさらにお子さんをもつにあたり不安に思うことを、現在子どもさんがいない方は、将来子どもをもつと仮定して不安に思うことをいくつでもお答えください。

	男性				女性			
	全体	18～24歳	25～29歳	30～34歳	全体	18～24歳	25～29歳	30～34歳
合計	181	94	41	46	161	87	38	36
経済的なこと	73.5	74.5	80.5	65.2	72.7	71.3	76.3	72.2
保育所などの保育サービスの不足	20.4	23.4	24.4	10.9	40.4	42.5	42.1	33.3
パートナーの協力が期待できない	5.5	9.6	2.4	0.0	29.8	25.3	39.5	30.6
仕事に関すること	25.4	23.4	34.1	21.7	51.6	42.5	71.1	52.8
出産や子育てにともなう心身の負担	22.7	22.3	29.3	17.4	55.3	51.7	68.4	50.0
自分やパートナーの時間がなくなる	36.5	35.1	48.8	28.3	28.0	27.6	34.2	22.2
親になることに自信がない	22.1	20.2	26.8	21.7	34.2	35.6	28.9	36.1
子育てが両親の介護と同じ時期	9.9	5.3	9.8	19.6	10.6	5.7	7.9	25.0
その他	1.7	1.1	2.4	2.2	1.9	0.0	2.6	5.6
特に不安はない	7.2	6.4	4.9	10.9	1.9	1.1	2.6	2.8
子どもを持つつもりはない	2.2	3.2	2.4	0.0	1.9	1.1	0.0	5.6
不明	2.2	1.1	2.4	4.3	1.9	3.4	0.0	0.0

所などの保育サービスの不足」「親になることに自信がない」「自分やパートナーの時間がなくなる」などを挙げている。男女差が顕著なのは女性の方が「出産や子育てにともなう心身の負担」「仕事に関すること」「保育所などの保育サービスの不足」「パートナーの協力に期待できない」「親になることに自信がない」で男性に比べて高かった。男性は「特に不安はない」とし、子どもをもつことへの女性側の不安の大きさを知ることとなった（表6）。

「配偶者や恋人とのセックス（性交渉）をどう考えているか（イメージしているか）」を尋ねると、男性が女性を超えていたのは「性的な快楽」「安らぎ」「ふれあい」など、女性では「愛情の表現」「子どもをつくる」「義務」などが目立った。

「少子化に関連して、政府あるいは自治体に特に努力して欲しいことは何か」については、男女ともに「子育ての経済的支援」を第一に挙げ、次いで男性では「子どもの教育費の支援」「結婚のための経済的支

表７　少子化に関連して、政府あるいは自治体に特に努力してほしいと思うことは何ですか。（当てはまるもの２つまで）

	男性				女性			
	全体	18～24歳	25～29歳	30～34歳	全体	18～24歳	25～29歳	30～34歳
合計	181	94	41	46	161	87	38	36
結婚相手を探す手助け	15.5	12.8	19.5	17.4	8.7	9.2	2.6	13.9
結婚のための経済的支援	24.9	25.5	24.4	23.9	18.0	14.9	26.3	16.7
子育ての経済的支援	44.8	48.9	43.9	37.0	44.7	49.4	36.8	41.7
子どもの教育費の支援	26.0	24.5	26.8	28.3	37.3	42.5	28.9	33.3
出産や子育てへの社会的支援	18.2	12.8	19.5	28.3	22.4	21.8	23.7	22.2
仕事と家庭の両立支援	22.1	19.1	24.4	26.1	28.0	23.0	34.2	33.3
男性の家事・育児参加促す為の支援	4.4	5.3	7.3	0.0	7.5	3.4	18.4	5.6
労働時間短縮や育休など企業の支援	21.5	22.3	26.8	15.2	18.0	19.5	13.2	19.4
その他	1.7	1.1	0.0	4.3	0.0	0.0	0.0	0.0
特にない（必要ない）	5.5	7.4	2.4	4.3	4.3	2.3	5.3	8.3
不明	2.8	3.2	2.4	2.2	1.2	2.3	0.0	0.0

援」を、女性は「子どもの教育費の支援」「仕事と家庭の両立支援」「出産や子育てへの社会的支援」を挙げている。未婚者に対する調査ではあるが、「結婚相手を探す手助け」は男性の 15.5%、女性の 8.7% が回答したに過ぎず、むしろ経済的な支援を求める声が多かった（表７）。

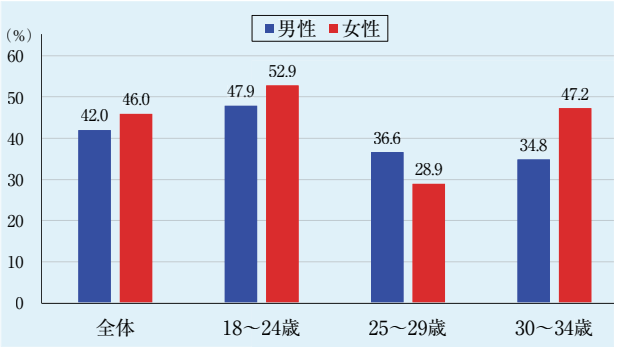
◆ トピックス４

18 歳から34 歳の未婚男性の42.0％、女性の 46.0％が性交経験なし

国立社会保障・人口問題研究所が実施した「第 15 回出生動向基本調査結果」では、異性との性交経験のない未婚者割合が 18 ～ 34 歳の男性 42.0%、女性 44.2% と前回の調査から増加したことが注目された。筆者らが実施した「第 8 回調査」結果も同様で、18 ～ 34 歳の未婚男性では 42.0%、女性の場合 46.0% であり、30 ～ 34 歳でも、男性の 34.8%、女性の 47.2% が性交経験を有していないことがわかった（図４）。国の研究機関が行った調査結果と遜色なかったことをまず喜ぶとともに、その特徴を探ってみると、興味深い結果が次々と明らかになった。

18 ～ 34 歳の「性交経験のない」未婚男性の特徴を探ると、年齢が低い方が「なし」が多いのは当然だが、「結婚するつもりはない」「社会的に信用を得たり周囲と対等になれる」ことが結婚の利点ではない、「セックスに関心がない、嫌悪している」「女性ホルモン剤を知らない」「最終学歴が高卒まで」「タバコを吸わない」「酒を飲まない」などが挙げられた（次ページ表８）。

図４　未婚男女（18 歳～ 34 歳）のうち、性交経験のない割合（%）



一方、女性は、年齢が 18 ～ 24 歳では「生活上便利になることを結婚の利点と考える」「結婚せずに子どもをもつことに抵抗感がある」「セックスに関心がない、嫌悪している」「女性ホルモン剤を知らない」「最終学歴が高卒まで」「タバコを吸わない」、人工妊娠中絶を認めるかに「認めない」「どちらともいえない」で「性交経験なし」が目立った（次ページ表９）。

異性と関わることを面倒だと感じているとか、セックスに関心がないというのが、セックス未経験者にとって当然であるとしても、筆者がもっとも注目したのはタバコを吸わない、アルコールを飲まない人に性交経験がないことであった。

拙著『セックス嫌いな若者たち』（メディアファク

表８　性交経験の有無別に見た 18 歳～ 34 歳の未婚男性の特徴　（%）

		性交経験あり	性交経験なし
年齢	18～24歳	48.9	47.9
	25～29歳	61.0	36.6
	30～34歳	58.7	34.8
結婚したいか	いずれ結婚したい	60.4	34.9
	結婚するつもりはない	25.0	75.0
	わからない	25.0	75.0
結婚の利点：社会的に信用を得たり周囲と対等になれる	利点はない	41.4	58.6
	利点がある	69.0	28.7
結婚せずに子どもをもつこと	抵抗感がない	60.6	34.8
	抵抗感がある	51.3	46.9
セックス（性交渉）に関心があるか	関心がある	65.0	34.3
	関心がない、嫌悪している	23.7	76.3
女性ホルモン剤（ピルや低用量ホルモン剤）を知っていますか。	知っている	69.1	29.4
	知らない	47.6	52.4
最終学歴	高卒まで	47.7	50.5
	高卒以上	66.2	29.6
タバコを習慣的に吸っているか	もともと吸わない	45.0	52.5
	習慣的に吸っている	75.7	21.4
1週間の飲酒量	飲まない	41.8	56.4
	飲む	70.2	27.7
国の少子化に対する数値目標について	国は目標に向け積極的に取組むべき	67.9	30.2
	数値より子育て環境改善に努めるべき	47.9	48.9
	個人の問題に口を挟むべきではない	58.6	41.4

表９　性交経験の有無別に見た 18 歳～ 34 歳の未婚女性の特徴

		性交経験あり	性交経験なし
年齢	18～24歳	41.4	52.9
	25～29歳	68.4	28.9
	30～34歳	52.8	47.2
結婚の利点：生活上便利になる	利点はない	76.5	17.6
	利点がある	41.3	58.7
結婚せずに子どもをもつこと	抵抗感がない	64.6	33.3
	抵抗感がある	45.5	52.7
セックス（性交渉）に関心があるか	関心がある	60.0	38.8
	関心がない,嫌悪している	42.9	55.7
女性ホルモン剤（ピルや低用量ホルモン剤）を知っているか	知っている	58.5	38.5
	知らない	45.6	53.3
最終学歴	高卒まで	42.9	54.8
	高卒以上	60.8	37.8
タバコを習慣的に吸っているか	もともと吸わない	47.2	50.0
	吸ったことがある	88.5	7.7
あなたは、人工妊娠中絶についてどう思いますか。あなたの考えに一番近いものを選んでください。	認める	71.4	14.3
	一定条件満たす場合はやむをえない	56.9	42.2
	認めない	44.4	55.6
	どちらともいえない	33.3	61.1
	この中にはない	25.0	75.0

トリー新書）の執筆に際して、“草食系男子”にインタビューした際にも禁煙・禁酒の声を多く聞いたが、その理由は健康意識の高まりというのではなく、経済的な余裕がないことと関係していた。事実、国税庁の統計によれば、サラリーマンの平均年収は 2013 年度、2014 年度がそれぞれ 414 万円、415 万円と横這いにあるとはいえ、1997 年度の 467 万円には遠く及ばない。2014 年度の年収は平均年齢 45.5 歳、勤務年数 12 年のもので、男女の格差は 1.9 倍となっていた。性交経験がないと指摘された男女の年収がこれよりも低いのは言うまでもない。しかも、携帯電話やスマートフォンの経費がかかり過ぎて恋愛どころではないともいう。総務省が発表した「平成 27 年度情報通信白書」からも、それを窺い知ることができる。2003 年末から世帯での携帯電話が 9 割を超え、2009 年以降固定電話は減少。10 年に登場したスマートフォンは急激な伸びを示し、14 年には 64.2% に達している。国立社会保障・人口問題研究所が行った 2010 年調査以降、性

図５　わが国における人工妊娠中絶実施件数の年次推移

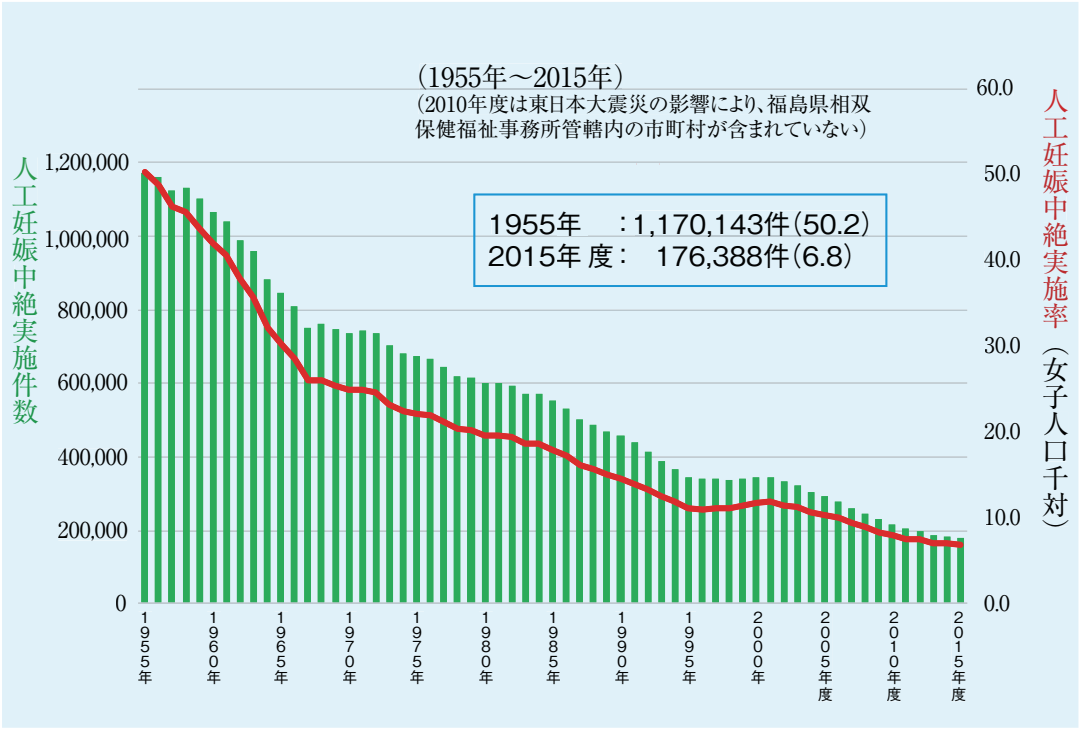
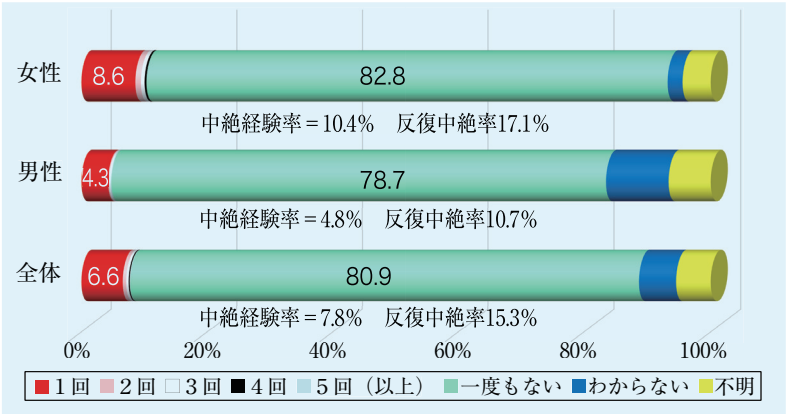


図６　あなた（あるいは、あなたの相手）は人工妊娠中絶手術を受けたことがあるか



交未経験者の割合が上昇に転じていることと無縁ではないように思われる。

◆ トピックス５

人工妊娠中絶実施率の減少は性行動の停滞と関係か？

わが国の人工妊娠中絶統計は、衛生行政報告例（母体保護関係）での報告だが、直近 2015 年度には初めて 18 万件を割り 176,388 件（女子人口千対の中絶実施率 6.8）に。1955 年には 117 万件（中絶実施率 50.2）の中絶があったことを思えば隔世の感がある（図５）。

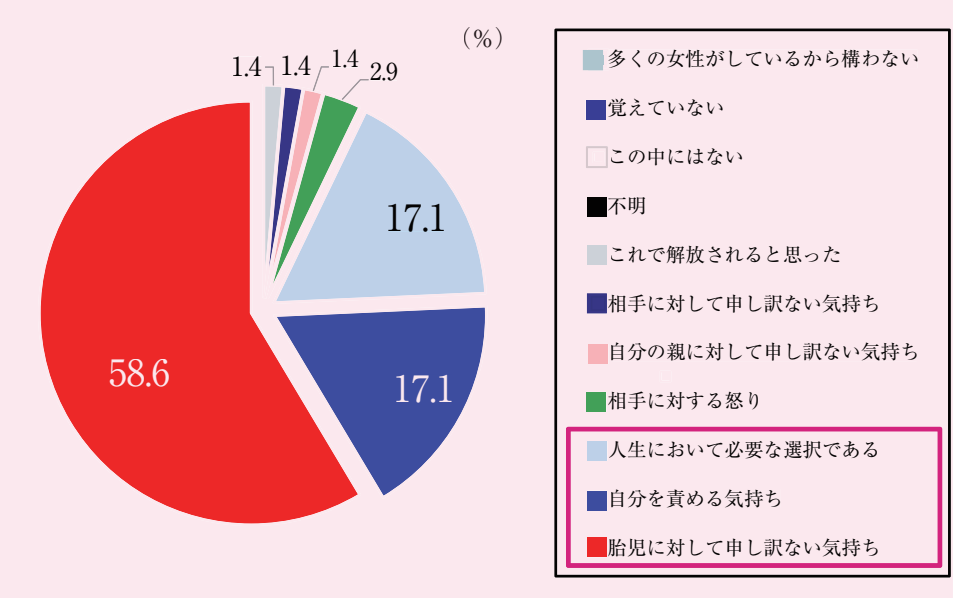
人工妊娠中絶を認めるのは全体の 68.5%（男性 65.6%、女性 71.0%）であった。手術を受けたことがある女性は 10.4%、その一方であなたの相手が受けたことがあるかと男性に聞くと 4.8% と結果には大きな開きがある（図６）。本調査はカップリング調査ではないが、おそらく男性が知らないまま手術を受けている可能性を否定できない。中絶を繰り返している女性は 17.1% で、第８回調査が過去最低となっている。わが国の中絶実施件数の減少を反映しているのか、中絶を実施している施設での中絶後の避妊指導が徹底された結果なのかなお調査が必要であろう。

「最初の人工妊娠中絶手術を受けることを決めた理由」を女性に聞くと、「経済的な余裕がない」「相手と結婚していないので産めない」がそれぞれ 24.3% で

表 10　最初の人工妊娠中絶手術を受けることを決めた理由（女性）

	2002年	2004年	2006年	2008年	2010年	2012年	2014年	2016年
該当数	154	145	110	122	135	102	81	70
経済的な余裕がない	19.5	17.2	16.4	15.6	13.3	15.7	24.7	24.3
相手と結婚していないので産めない	36.4	22.1	22.7	27.9	27.4	31.4	22.2	24.3
相手が出産に同意しなかった	-	-	-	-	-	-	9.9	7.1
自分の仕事・学業を中断したくない	-	9.0	10.0	6.6	7.4	8.8	8.6	8.6
育児していく自信がない	-	4.1	2.7	3.3	3.0	2.9	4.9	7.1
相手との将来を描けない	-	6.9	9.1	12.3	11.9	10.8	4.9	5.7
これ以上、子どもは欲しくない	9.1	4.1	7.3	3.3	4.4	6.9	-	4.3
身体が妊娠・出産に耐えられない	8.4	8.3	4.5	3.3	5.9	2.9	1.2	2.9
出生前診断の結果から決めた	-	-	-	-	-	-	-	0.0
相手が特定できない	-	0.7	-	-	0.7	1.0	-	1.4
相手のことが好きでない	-	1.4	1.8	2.5	0.0	3.9	-	0.0
この中にはない	26.6	24.8	25.5	23.8	26.0	15.7	23.5	12.9
無回答	-	1.4	-	1.6	-	-	-	1.4

図 7　最初の人工妊娠中絶を受ける時の気持ち（女性）



上位を占めている。「経済的な余裕がない」は第 7 回調査から第一位となっている（表 10）。

わが国の中絶は、母体保護法によって規定され、その許可要件は「経済的な問題を含む女性の健康」「暴力・脅迫による妊娠」に限られるが、回答者のうち、これに該当するのは「経済的余裕がない」(24.3%) と「身体が妊娠・出産に耐えられない」(2.9%) とを足し合わせた 27.2% に過ぎないことも注目に値する。さらに、「最初の人工妊娠中絶を受ける時の気持ち」を尋ねると、トップは「胎児に対して申し訳ない気持ち」(58.6%)、「自分を責める気持ち」(17.1%) が上位を占める傾向はここ 8 回の調査では変わらない（図 7）。リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（性と生殖に関する健康と権利）の視点からは「人生において必要な選択である」が増えることが期待されるが、第 8 回調査でも 17.1% に留まるものの、過去と比べると増加傾向にある。

◆ トピックス 6

性に関わる情報は中学卒業までに知っておきたい

本調査では、第 1 回（2002 年）以来、毎回「性に関する事柄について、何歳までに知るべきか」について聞いている。

今回は、従来の 16 項目に「妊娠・出産年齢には限

表 11　性に関する以下の事柄について、15 歳までに知るべきと思う割合（%）

	2002年	2004年	2006年	2008年	2010年	2012年	2014年	2016年
男女の心と身体の違い	90.3	88.7	92.7	93.7	92.6	91.4	91.3	89.6
二次性徴、月経、射精などの仕組み	90.8	89.6	94.1	95.0	93.0	92.1	87.0	90.4
受精、妊娠、出産、誕生のしくみ	86.7	84.9	90.6	91.9	89.8	87.3	70.7	87.2
セックス（性交渉）	-	65.7	73.2	74.9	73.4	69.1	71.9	71.0
避妊法	75.0	70.1	76.5	77.2	76.3	73.9	60.7	73.5
人工妊娠中絶	66.8	61.4	66.9	68.0	65.1	62.5	74.0	62.7
エイズとその予防	75.1	71.8	78.1	77.0	77.1	75.1	72.5	70.5
エイズ以外の性感染症とその予防	72.3	68.8	73.5	74.7	74.2	72.7	65.2	69.1
コンドームの使い方	62.8	61.8	68.7	68.5	67.2	65.6	56.5	66.3
多様な性のあり方	50.6	50.8	55.7	57.5	59.4	57.7	64.1	62.2
性的被害の対処法	61.0	60.4	66.1	67.7	66.2	65.9	77.9	66.0
男女間の平等や助け合い	73.1	75.4	81.5	80.0	80.4	79.2	58.0	76.7
結婚	49.9	46.6	57.5	58.6	59.5	60.5	54.2	57.6
離婚	45.7	41.7	52.7	53.7	56.1	55.3	83.7	53.6
人と人とのコミュニケーション	76.0	80.2	84.7	85.9	86.4	84.1	74.7	82.7
性に関する倫理や道徳	70.9	72.1	76.2	78.1	76.8	73.4	91.3	72.5
妊娠・出産年齢には限界がある	-	-	-	-	-	-	-	51.2

界がある」を加えた。

国民の大半はこれら 17 項目については 15 歳まで、すなわち義務教育終了までには知るべきと考えている。前回比大きく減少したのが、「人工妊娠中絶」「性的被害の対処法」「離婚」「性に関する倫理や道徳」など。一方、大幅に増加したのは、「受精・妊娠・出産・誕生のしくみ」「避妊法」「男女平等や助け合い」「人と人とのコミュニケーション」など。

なお「コンドームの使い方」については、前回 2014 年調査では減少したが、今回の調査では、2012 年調査以前の水準に戻っている。中学生に「コンドームの使い方」を教えることは、不適正な性教育との烙印を押されかねないが、国民は義務教育の間にきちんと教え、学んで欲しいと願っているのがわかる。

また、今回初めて「妊娠・出産年齢には限界がある」を加えたが 51.2% が「15 歳までに知るべき」と考えている。これらの結果を踏まえて、国民の期待に教育現場はどう応えていけるのだろうか（表 11）。

◆ おわりに

「第 8 回男女の生活と意識に関する調査」結果を、本紙を通じて紹介させていただく機会を得たことをまず御礼申し上げたい。同時に、過去 8 回分の調査報告書、今回の調査結果の概要、パワーポイントデータを含む CD-ROM が本会あるいは amazon を通じて入手できることを最後に申し添える。

（注）

層化二段無作為抽出法とは、まず、全国の市区町村について都道府県を単位として 11 地区に分類し、さらに、各地区においては、都市規模によって大都市、人口 20 万人以上の都市、人口 10 万人以上の都市、人口 10 万人未満の都市、町村の 5 層に層化した。その上で、区・都市規模別各層における推計母集団数の大きさにより、それぞれ 3,000 の標本数を比例配分し、各調査地点の標本数が 13 ～ 24 になるように決定した。次に、抽出の 1 段階目として、各層内で国勢調査区より割り当てられた地点数を無作為に抽出し、2 段階目として各地点を管轄する自治体の役場で住民基本台帳から対象者個人を抽出した。調査は、平成 28 年 10 月 13 日（木）～ 11 月 22 日（火）の期間、抽出された対象者宅に調査員が訪問し、調査票を手渡し、その後回収に伺うという方法（調査員による訪問留置訪問回収法）がとられた。

※本調査結果に対するお問い合わせは、
一般社団法人日本家族計画協会
家族計画研究センター
北村邦夫（kitamura@jfpa.or.jp）まで
TEL：03-3235-2694　　FAX：03-3269-6294

◉AOFS Japan シンポジウム報告◉

性の自律性・身体の完全性に関する権利

2016 年 12 月 3 日（土曜日）午後 1 時より日本性教育協会セミナールームで、シンポジウム「男児の性器切除と身体の自律性・完全性に関する権利」が開催された。これは、AOFS Japan が 2014 年 3 月 30 日（日）に開催した「My Body My Life：身体と性の自律について」の第 2 弾という位置づけで企画されたものである。これまでご紹介する機会のなかった第 1 弾とあわせてご報告する。

AOFS 諮問委員／大阪府立大学教授　東　優子

2012 年に松江市で開催された第 12 回アジア・オセアニア性科学学会（会長・大川玲子氏）をきっかけに発足した AOFS Japan 委員会（事務局・今福貴子氏）では、国内における性科学の活性化を目的に、国際会議に参加する若手を対象とした助成金の支給や、その説明会を兼ねた講演会など、各種イベントを企画・運営している。今回のシンポジウムもそのひとつで、「性の自律性・身体の完全性」をテーマにしたものとしては、2014 年 3 月に続いてこれが 2 回目となる。以下、これまで報告する機会のなかった第 1 弾とあわせて、当日の様子を紹介したい。

自律性と身体保全・統合性を巡る、古くて新しい問題

自律性（autonomy）と身体保全・統合性（bodily integrity）の権利は、基本的人権である。「性の権利宣言」（WAS 2014）に登場するこの権利は、次のとおりである。「人は誰も、セクシュアリティと身体に関する事柄について自由に自己管理し、自己決定する権利を有する。これには、他者の権利を尊重しつつ、性行動・性行為・性的パートナーや性的関係に関して選択する権利が含まれる。自由かつ情報に基づく意思決定を保障するには、性に関わるあらゆる検査・介入・セラピー・手術あるいは研究の実施に先立って、自由な環境で、説明に基づく同意を得る必要がある。」（WAS「性の権利宣言」の邦訳版は、全文ダウンロード可[注1]）。

第 1 弾「My Body My Life ～身体と性の自律について」の様子（2014 年 3 月 30 日日本性教育協会セミナールーム）

第 2 弾「男児の性器切除と身体の自律性・完全性に関する権利」で講演する小貫大輔氏とティナ・ヴィルポネン氏（2016 年 12 月 3 日）

この権利の侵害事例には、同性間性交渉や同性愛を犯罪化することや、強制不妊手術（断種）、女性性器切除（FGM/C）などが含まれる。

優生政策の暗黒史において、特定の民族や人種、ハンセン病、障害を理由とする強制不妊手術（断種）が行われた例は知られているが、断種（不妊化）の強要・強制は過去の話でも、外国の話でもない。たとえ

ば障害のある女性たちが受ける不妊手術について、形式上はインフォームド・コンセント（説明同意）に基づいていたとしても、そもそも NO とは言えない環境に囲い込まれていることが問題として指摘されている。これについては、その他多くの事例とともに、世界保健機構（WHO）ら複数の国連機関による共同声明「強要、強制および非自発的な不妊化を排除することに関する共同声明」(全文ダウンロード可[注2]）に詳述されているので参照されたい

この共同声明には、full, free and informed consent（十分かつ、自由で、情報に基づく同意）という文言が繰り返し登場する。そして、WHO らの共同声明が非難する権利侵害事例には、医学的緊急性のないインターセックス児への早期手術、およびトランスジェンダーの性別変更に係る「手術要件」なども含まれている。前出の WAS「性の権利宣言」でも、「自由かつ情報に基づく意思決定を保障するには（中略）自由な環境で、説明に基づく同意を得る必要がある」と述べられていたとおりである。

性別違和と医療：手術を受ける自由と受けない自由

そこで、2014 年 3 月 30 日に開催されたシンポジウム 1 弾「My Body, My Life ～身体と性の自律について～」では、トランスジェンダーの健康と権利に関する国際学会 WPATH 理事のサム・ウィンター教授（カーチン大学）に、講演「性別違和と医療：手術を受ける自由と受けない自由」をお願いすることになった（当時の所属は香港大学で、大阪府立大学のゲストプロフェッサーとして滞日中だった）。

日本には「性同一性障害特例法」(2004 年施行）があり、性同一性障害の診断を受けた者が戸籍上の性別を変更することができるようになっている。しかし、そのためには「断種（不妊化）」や「身体（外性器）変容」など 5 つの要件を満たさなければならない。

ウィンター教授は、すでに「手術要件」を撤廃しているアルゼンチンや英国の例を紹介し、トランスジェンダーの人々の性別適合手術へのアクセスや自己決定は最大限に尊重されるべきだが、性別変更に伴う「手術要件」は公権力の乱用であり、撤廃されなければならない、と熱く語った。

「手術を受ける自由と受けない自由」について講演するサム・ウィンター教授（香港大学＝ 2014 年当時）

日本のペニスは「切らないのにむける」特殊なペニス？

これに続いてご登壇いただいたのは、AOFS 評議員でもある小貫大輔氏（東海大学教授）である。第 1 弾（2014）と第 2 弾（2016）の両方で講演していただいた内容を、以下にまとめてご報告する（第 1 弾では、日本式のお辞儀、西洋式の握手、ブラジル式のキスという、三者三様の挨拶を通じて三者三様の文化の特徴を体感するワークショップも行ったが、その報告については紙幅の都合で割愛する）。

次ページに示す 2 枚のスライドは、小貫教授による 1995 年のパイロット調査（インタビュー形式）の結果である。「あなたのペニスは（勃起していないとき）どんな姿をしていますか」という質問を日本ですると、成人男性の 53.6% が「包皮が完全にむけている」、3.1% が「包皮が完全にかぶっている」と回答するのに対し、ドイツでは結果が逆転し、「包皮が完全にむけている」と回答した人はわずかに 1.9% で、55.8% の成人男性が「包皮が完全にかぶっている」と回答したという。さらに、「割礼を受けていない大人のペニスは（勃起していないとき）どんな姿だと思いますか？」という質問についても、日本では 6 割以上が「包皮が完全にむけた状態」、ドイツでは 7 割近くが「包皮が完全にかぶった状態」と回答したという。

なんとも不思議な話だが、日本のペニスだけが「切らないのにむける」特殊なペニスなのかと言えば、もちろん、そうではない。日本では、包皮がかぶった状態を「仮性包茎」と呼び、ペニスにまつわる男性の三

大コンプレックス（短小・早漏・包茎）の一つに挙げられている。青春時代の小貫教授も「皮をむく練習」を一生懸命に繰り返した結果、ある時から常時「むけた」状態になったという。

講演では紹介されなかったが、日本人の包茎コンプレックスは、有名な某美容整形外科医が捏造した「常識」に由来しているという話がある（詳しくは、澁谷知美著『平成オトコ塾　悩める男子のための全６章』筑摩書房 2009 年を参照のこと）。1970 年代に「包茎ビジネス」を始めるにあたって、「包皮がかぶったままだと不潔で、女が相手にしない」といった情報を雑誌などで広めたのだという。それまで「日本人は包茎に興味がなかった」というのだから、これが本当だとすれば罪な話である。

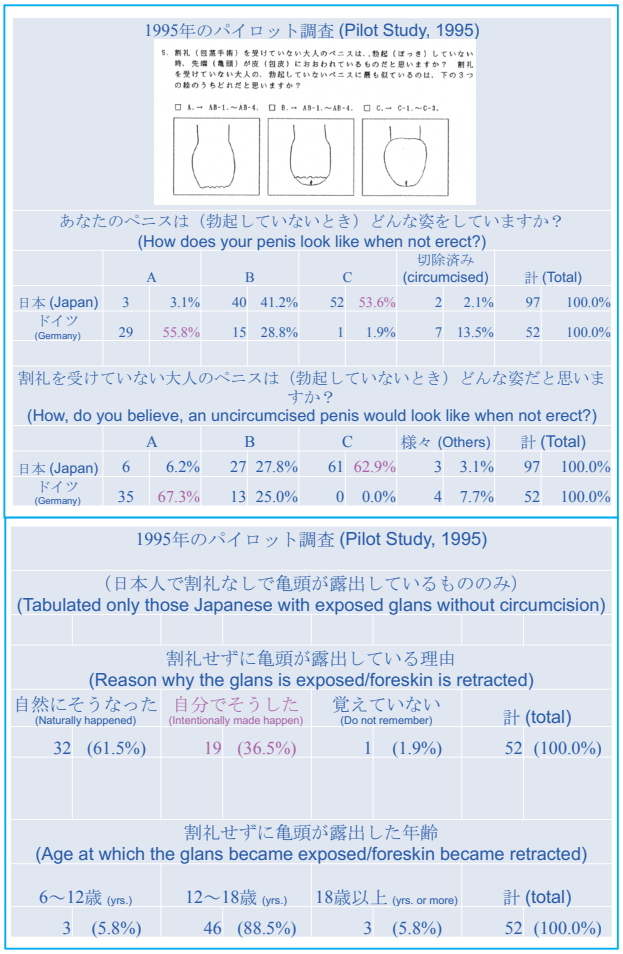
後述するように、米国などでは「包茎ビジネス」が大成功をおさめている。日本では、「切る」代わりに「むく」ことを奨励する専門家が多く、泌尿器科医の岩室紳也氏が考案した「むきむき体操」など、育児雑誌やインターネットには「むく」メリットに関する情報が溢れている。「包茎ビジネス」に批判的な小貫氏は、手術を必要としない日本式の男性性器ケアを諸外国に発信して普及すれば、諸外国での包皮切除術も減るのではないかと語った。

性の権利としての性器の自律

日本の事情は非常に興味深いとしながらも、「むく」必要は一切ないと主張したのが、第２弾（2016 年）二人目の講師で、フィンランド・セクスポ財団のセックス・セラピストであるティナ・ヴィルポネン氏である。

1969 年創立の同財団は、フィンランドの最古にして最大の性科学・性教育組織で、専門家研修や調査研究、情報提供などを行っている。2011 ～ 2014 年に実施した「未成年男子の性器の自律性を推進するプロジェクト」では、治療目的ではない包皮切除術のリスク、被害、倫理的問題に関する情報を提供してきたという。

プロジェクトが終了してからも、国内外からの問い合わせや、包皮切除術を受けた男性たちからのカウンセリング依頼が続いている。そこで、2016 年に開催したシンポジウムでは「性の権利としての性器の自律」と題し、男児の性器切除問題とこれに関する国際的動向を解説していただいた。以下はその要約である。



小貫大輔氏（東海大学国際学科教授）の講演スライド

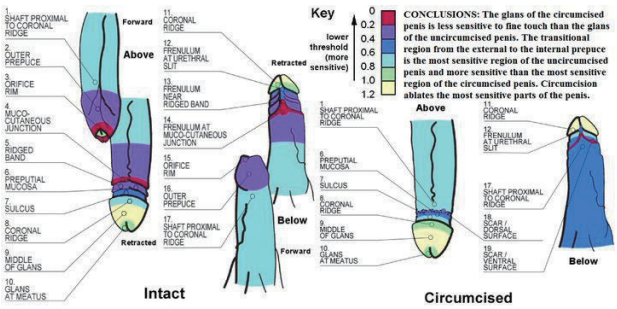
自律性と身体保全の権利に関する、宣言・決議・条約・声明

冒頭で紹介した WAS「性の権利宣言」を始めとして、自律性と身体保全の権利は様々な公文書に明記された人権である。講演でも、子どもの権利条約、欧州評議会決議、子どもと小児専門家のためのノルディック・オンブズパーソンズによる声明、欧州 16 カ国の医師有志による声明など、様々な例が紹介された。以下は、ノルディック臨床性科学協会の声明である。

「臨床性科学者として、私たちは、男児に対する治療目的でない包皮切除の人権的側面を憂慮する。正常で健康な性器をもつ男児のペニスの包皮を切除することは、彼らが成長した後に、自身でインフォームド・デシジョン（説明に基づく自己決定）を下す権利を奪うことである。」

様々な機能をもつ包皮を切除するということ

ペニスの包皮には、保護的、性的、感覚的、機械的および免疫学的な機能がある。あらゆる手術にはリス



ファインタッチを感じとる閾値の違い：成人男性の包皮切除術を受けているペニスと受けていないペニスの比較（出典：Sorrells ML, Snyder JL, Reiss MD, et al. Fine-touch pressure thresholds in the adult penis. BJU Int 2007;99:864-9.）

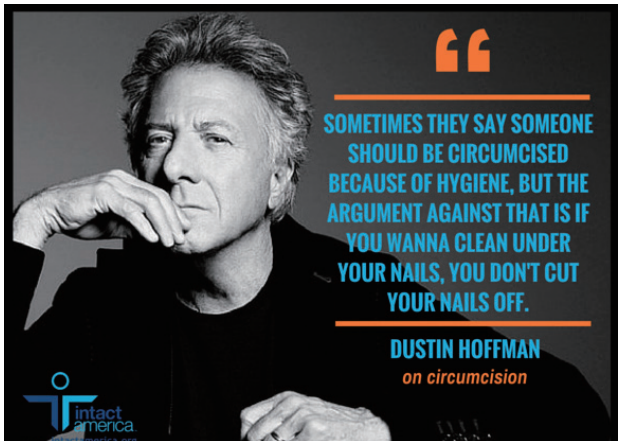
クが伴うものであるが、術前に亀頭に癒着した状態にある幼少期の包皮を術前に強制的に分離することから始まる包皮切除術についても、様々な副作用、ペニスの損傷・喪失、死に至った事例などが報告されている。

長期的なダメージ

包皮切除は、自然で、健康的で、機能に問題のない身体の一部を喪失することを意味する。亀頭の保湿と敏感さを保護するための包皮がなくなることによって、性的感覚・快感が減退する（小貫氏が紹介した「切らないのにむける」ペニスもまた、常時亀頭が露出した状態にするものなので、同じような負の影響が考えられるのではないか、とヴィルポネン氏はコメントした）。切ることによって、勃起障害やオーガズム障害、性的満足感の欠落などの問題が引き起こることもある。負の身体イメージ、様々な情緒的・心理的な問題も報告されている。

包皮切除術に反対する様々な声

性器切除を行う理由は、宗教（ユダヤ教やイスラム教）、成人儀礼・習俗（アフリカやオセアニア地域など）、衛生予防など、様々にある。とくに、キリスト教徒が8割を占める米国では、宗教上の理由ではなく、マスタベーション防止を目的として、あるいは衛生上の理由で19世紀末から男児の包皮切除が行われるようになり、2013年の疾病管理センター（CDC）報告によれば、米国男性（14～59歳）の81%が包皮切除術を受けているという。しかし近年では、包皮切除の倫理的問題をめぐる議論を背景として米国における新生児に対する施術率は減少傾向にあり、2007年の実施率は55.4%にまで下がっているという。



有名人を起用した啓発ポスター「衛生的にしたいなら割礼したほうがいいって言う人もいるけど、それは変だよね。爪の間を清潔にするのに爪を引っ剥がしたりする奴などいない。」（ダスティン・ホフマン　割礼について語る）

ヴィルポネン氏は、反対運動を展開する諸団体の啓発資材、さらには「失ったものについて悲しんでいるだけではなく、自分自身のことについて自己決定することを許されなかったことを悲しんでいるのです。」「私の身体に残った傷というのは、毎日のように、自分が生まれたままの姿では不十分だったのだということを思い起こさせます。恥ずかしいと感じるのです。」といったクライエントの声を引用しつつ、自己決定権や性の自律性・身体の完全性を奪うことの倫理的問題を強調した。彼女が訴える「これから必要なこと」は次のとおりである。

- Recognize the facts（事実を認識すること）
- Work together（協働すること）
- Break the silence（沈黙を破ること）
- Stop comparing（比較をやめること）
- Allow open future（未来＝可能性を開いておくこと）
- Keep in mind child's best interest（子どもにとって最善の利益とは何かを考えること）
- Promote human rights（人権を推進すること）
- Do not fear（怖れないこと）

終始、物静かで穏やかな印象のヴィルポネン氏だったが、「親の権利や、宗教上の理由で、身体に関する自己決定権を奪ってはならない。説明同意を与えられる年齢に達していない子どもたちに施術してはならない。」と語る言葉に、彼女の強い信念が伝わってきた。

シンポジウム第2弾の最後は、通訳を務めた私も加わり、普段あまり触れることのない北欧・欧州の動向について、参加者との質疑応答やディスカッションで大いに盛り上がった。

ちょっと”皮”った話

私がこの問題に関心をもった最初は、大学院生の頃である。リサーチレジデントとして勤務していたエイズ予防財団で受信したFAXがきっかけだった。米国小児医学会などが、HIV感染予防の有効な手段として包皮切除を奨励する、という内容だった。調べてみると、包皮切除に反対する運動があることがわかり、「ちょっと"皮"った話」というコラムを執筆した（『現代性教育研究月報』連載コラム「ユーコのSexuality Up to Date」1997年5月号掲載）。

女性性器切除（FGM/C）が著しい女性虐待、人権侵害であると認識されている一方で、「男子割礼」に反対する声が存在することは、当時も今も、ほとんど知られていない。そもそも、FGM（Female Genital Mutilation）という用語は、その非人道性を明確にする意図をもって「女子割礼」（Female Circumcision）に置き換えて使用されるようになったものである。

「男子割礼」をMGM（Male Genital Mutilation）と呼び直し、FGMと同じく根絶しようという運動がある一方で、現在でも、WHOおよびUNAIDSは、有効なHIV感染予防になるとして、これを奨励している。2015年に刊行されたUNAIDS報告書『いかにしてエイズ はすべてを変えたのか』（全文ダウンロード可[注3]）にも、「2008年から2014年12月までに優先14カ国で910万人が男子割礼を受けた。2014年だけで320万人である。エチオピアとケニアではすでに目標のカバー率80%を超えている。」と書かれている。前出のWHOらの共同声明（2014）にしても、「男子割礼」あるいはMGMを非難する記述はない。

HIV感染予防としての効果について、さらにそのエビデンスを提出した調査研究の方法については、様々な批判と異論が存在しており、今後、WHOやUNAIDSの結論が変わる可能性もある。また、「性の権利」という観点からも、この問題を巡る議論の活性化が予想される。今後ますます注目してゆきたい話題のひとつである。

包皮切除術に反対する民間団体の啓発ポスター「赤ちゃんの爪を切るのってドキドキする！誤って指を切っちゃったらどうしよう？出血させたり、痛い思いをさせたくないわ」というセリフに続いて、「割礼」のリスクは「爪切り」の比ではない、と説明している。

フィンランド・セクスポ財団との交流

普段は、英語で読める文献に頼り切りなので、北欧や欧州で培われた人権論や倫理・哲学に触れる機会が十分ではない。前述の繰り返しになるが、ヴィルポネン氏が所属するセクスポ財団は、1969年にフィンランドで創設された、フィンランド最古にして最大の性科学・性教育の専門機関である。フィンランドは、「ジェンダー・ギャップ」が最も少ないとされる国の一つであり、世界トップクラスの「教育大国」でもある。

私と野坂祐子（大阪大学大学院）が共同代表をしている「関西性教育研修セミナー」では、2017年度夏にフィンランド・スタディ・ツアーを企画している。専門家養成プログラムの体験をするほか、関連施設見学、現地の大学院生や専門家との交流を予定している。詳細については、後日、本紙（『現代性教育研究ジャーナル』のインフォメーションページで告知する予定なので、興味のある方にお知らせいただければ幸いである。

（注）
（注１）http://www.worldsexology.org/wp-content/uploads/2014/10/DSR-Japanese.pdf
（注２）http://apps.who.int/iris/bitstream/10665/112848/1/9789241507325_eng.pdf
（注３）http://www.unaids.org/sites/default/files/media_asset/MDG6Report_en.pdf

男子の性 隔月連載 18(最終回)

性は良くも悪くも「人」を育てる

岩室紳也
オフィスいわむろ代表
厚木市立病院 泌尿器科

「性の多様性」というきれいなことば

早乙女先生は最終回で「この連載は男性・女性という二元論でのキャッチボールで、性の多様性という面では足りないところばかりでした」と指摘されました。確か36回に及ぶ連載では「男」と「女」、「男子」と「女子」というキャッチボールが展開されてきましたが、早乙女先生も、岩室も、性の多様性についての意識がなかったわけではありません。というか、「性の多様性」をことさら書き連ねるこの方が問題、きれいごとと思っています。

そもそもLGBTという表現自体、性の多様性を枠にはめようとしている言葉です。その意味でも、まずは「男子の性」、「女子の性」という古典的枠組みで二人がキャッチボール的に書くことでブレイクスルーになればと思っていましたがいかがだったでしょうか。

さらに言えば、この連載は、「性」が引き起こす個人の問題だけではなく、様々な社会現象に着目しました。最終回に当たって、「性」がどれだけ「男」を翻弄し、「性」にきちんと向き合わないととんでもないことが今後も起きるリスクがあるという視点で考察してみました。

＊　　＊

若者の実情に無関心な大人たち

中高生の卒業前の年度末の時期は、性に関する講演会に明け暮れますが、伝えたいことは性のトラブルの回避方法でも、コンドームでもありません。私が伝えたい言葉は、「人は経験に学び、経験していないことは他人ごと」です。

大人たちはよく子どもたちに「正しい知識を持ちましょう」と言います。では、私のHIV/AIDSの患者さんは「正しい知識」がなかった、おバカさんの集まりでしょうか。とんでもありません。それでも「正しい知識」にこだわる大人たちは、マザーテレサの言葉「愛の反対は無関心」にあるようにトラブルに巻き込まれる若者たちに「無関心」なだけです。トラブルに巻き込まれた人たちの気持ちに思いを寄せる、共感することができていれば「正しい知識」といった無味乾燥な言葉は出ないはずです。若者たちがどのような困難を突き付けられているのかを考えられたら、若者たちの実情に関心があれば、もっと言えば、直接的には関係がなくても、若者たちに対する「愛」があれば、何かを感じ、何かをしたいと思えるはずです。

＊　　＊

「相模原」ではなく「津久井」の事件

2016年7月26日に相模原市緑区にある津久井やまゆり園で起きた障がい者殺傷事件をこの連載の最後に考えたいと思います。凶悪事件を起こす犯人は必ずしも男ではありませんが、今回の事件といい、秋葉原の事件といい、世の中で繰り返される凶悪犯罪の多くに「男」が関わっています。

いやいや、女性の体力では今回のようなことはできなかったと思っている人が多いと思いますが、そう考えること自体、「男子の性」を取り巻く状況をきちんと見つめていないと考えてしまいます。

そもそもこの事件を「相模原の事件」とマスコミは報道していますが、これは「津久井の事件」です。神奈川県内でも知らない、忘れてしまった人が増えていますが、相模原市は政令指定都市になるため、2006年から旧神奈川県津久井郡の4町を吸収合併し、合併後、旧「津久井郡」は「緑区」にさせられてしまいました。津久井やまゆり園があった相模湖町といった旧町名もすべて消されてしまいました。歴史に名を遺す多くの「男」たちは自分の存在を後世に残すため、それまであった者の、物の、地域の存在自体も否定してきたことは、数多の歴史が教えてくれています。

＊　　＊

津久井は岩室紳也の医者の原点

私が今回「津久井やまゆり園の事件」を取り上げたのは津久井やまゆり園を「経験」しているからです。私が卒業した自治医科大学は、医師確保が困難な僻地

に医者を送り込むために設立されました。卒業後、出身高校の所在地の神奈川県に採用され、義務の一環として当時神奈川県津久井郡津久井町にあった青野原診療所に住み込みで赴任し、その後の津久井保健所勤務と合わせた約７年間の津久井での経験が私の医者としての、そしてその後の活動の原点になりました。

忘れられないのが、津久井町役場が仕掛けた自治会館を回っての夜のお酒付き講演会でした。新任の私だけではなく、保健師の資格を持っている私の家内も一緒に顔見世興行のように地区の全ての自治会館にお邪魔した時、住民の方が率直に「先生の話はつまんねえ、もっと奥さんにしゃべらせろ」と言われました。家内は私より現場経験があっただけではなく、住民さんが聞きたいことを話していなかった自分の愚かさをストレートな声で教えていただきました。

津久井やまゆり園の近くには他の自治医大卒業生が赴任していた千木良診療所がありましたが、そこの医者が不在の時は何度か園に往診に行ったこともあり、今回の事件は他人ごとではありません。

＊　　＊

語られていない事実

高額なお金を積んでも医師が確保できない過疎地にある津久井やまゆり園は、以前は神奈川県直営の施設で職員も公務員でした。しかし、公務員減らしを推し進める世論に後押しされ、建物は神奈川県が設置、運営は民間に委託という公設民営化になりました。今でも多くの職員の方が真摯に頑張っておられることは言うまでもありませんが、人材を確保することに苦労されていることは間違いありません。公務員であれば、へき地の津久井勤務になっても、身分と給与は保証され、何年か後に他の地に転勤になると思って、津久井勤務が本意ではなくてもその間頑張れます。しかし、過疎地域で、最寄りの中央線相模湖駅まで４キロという立地での人材確保は容易ではありません。

＊　　＊

誰もが抱える「障害」

「『男』は環境で育つ性」（2015 年 No48）で紹介したように、欲望の塊であることは、相模原市から「津久井」を含めた旧町名が消えたことが何より証拠です。男子の性を考えれば当然の成り行きですが、大事なのはそのような暴走にブレーキをかける周囲、社会があるか否かですが、そこが弱くなっているのです。

今回の事件の犯人が「自己愛性人格障害」と診断されたことにぜひ学びたいものです。診断基準の９つの内、５つに該当した人がこの「障害」と診断されますが、自分に当てはめて考えてみてください。

岩室紳也は少なくとも２つが当てはまります。「共感の欠如：他人の気持ちおよび欲求を認識しようとしない、またはそれに気づこうとしない」。ゲイの人の気持ちを理解するどころか、ゲイは気持ち悪い、何でそのような人がいるのだと思っていました。水谷修さんや松本俊彦先生という薬物依存対策に先進的に取り組んでいる仲間がいるにもかかわらず、彼らの言葉を「自分ごと」として受け止めることができていませんでした。それは「自分が特別であり、独特であり、ほかの特別なまたは地位の高い人達に（または施設で）しか理解されない」ということでもあります。

「男はプライドの生き物」の裏返しが、この障がいの診断基準となっている「自己の重要性に関する誇大な感覚」、「限りない成功、権力、才気、美しさ、あるいは理想的な愛の空想にとらわれる」、「過剰な賞賛を求める」、「特権意識、つまり特別有利な取り計らい、または自分の期待に自動的に従うことを理由なく期待」「対人関係で相手を不当に利用」、「しばしば他人に嫉妬する、または他人が自分に嫉妬していると思い込む」、「尊大で傲慢な行動または態度」です。

＊　　＊

健全な性に育てる環境整備を

「男子の性」の危うさに無関心な社会が津久井やまゆり園の事件の一因です。「極論」と切り捨てる人もいるでしょうが、そう考えてしまうのは「原因と結果」がわかりにくいため、考えることを放棄してしまうからです。「性」はその人の社会性を育てる本能であるとともに、社会性が育たない時は、とんでもない結果を生む凶器にもなります。

一人ひとりの「性」が健全に育つために、私が、あなたが、きれいごとだけではない「性」と向き合い続け、できることを考え続ける忍耐と勇気が求められていることを、今後も発信し続けたいと思っています。長い間お読みいただき、ありがとうございました。

LINEでつながる

Dr.上村茂仁の 性の悩みクリニック

かみむら しげひと
ウィメンズクリニック・かみむら院長（岡山県岡山市）、医学博士

連載第12回 ▸▸▸仮性包茎でも、手術などの治療が必要ですか？

僕はいわゆる仮性包茎です。
勃起した時剥こうと思えば剥けるのですが、普段は亀頭が皮の中に隠れてしまいます。
セロテープ使ったり、輪ゴム巻いたりして頑張っていますが、どうしても普段は中に入ってしまいます。
どうしたらいいでしょうか。

男子からの相談で多いのが包茎の悩みです。ネット社会には、包茎手術をすすめる広告などが溢れています。必要のない包茎手術で高額な請求をされることのないよう、まず包茎についての正しい知識を持つことが大切です。

包茎は大きく３種類に分けられます。

仮性包茎（軽度・重度）、真性包茎、嵌頓（かんとん）包茎です。

①仮性包茎

仮性包茎は、普段は被っていて、亀頭が見えない状態だが、むいたらむける状態のものです。通常時・勃起時ともに、手で包皮を引っ張って問題なく亀頭が露出すれば仮性包茎といえます。

②真性包茎

真性包茎は、普段は亀頭部が通常時も勃起時も皮に覆われていて、むこうとしてもむけない状態の包茎のことを言います。

③嵌頓包茎

嵌頓包茎とは、見た目は仮性包茎のように見えますが、包皮輪（包皮の内径）が狭くなっており、この部分が亀頭を圧迫してしまう包茎のことをいいます。普段は皮をむくことができますが、勃起時には皮をむくことができなかったり、むけても亀頭を締め付けてしまう状態のものです。

日本人に一番多いのが仮性包茎です。普段はもちろん、勃起時も皮を下ろして、亀頭部を出すことが可能です。仮性包茎には軽度のものと重度のものがあります。軽度のものは普段は亀頭部の入口の外に露出しており、勃起することで、亀頭部のほとんどが外に出ます。またはほんの一部がかぶさっていますが手で簡単に下ろすことができる状態です。

重度は普段は亀頭部のほとんどが皮の中に入っていて、勃起した時も一部のみが露出するものです。ただし手で下ろせば亀頭は完全にむけるものを言います。

したがってこの包茎は特に問題はありません。そのままで構わないのです。

海外の男性裸体彫刻などを見ればわかりますが、ほとんどのものは皮を被っています。特に普段からむけている必要はないのです。

以前 AIDS 文化フォーラム・横浜で泌尿器科医の岩室紳也さんが５人の AV 男優と話していたのを聞きましたが、その中の４人は仮性包茎ということでした。確か仮性包茎の方がコンドームが外れにくいとか豪語されていたように思います。

大切なのは普段皮が被っているかどうかではなく、亀頭部の裏をしっかり洗えるかどうかということです。洗わないで放置しておくと恥垢が溜まって、包皮内炎を起こしたり、場合によっては陰茎ガンに発展することもあります。また HIV 感染や、子宮頚がんの原因である HPV 感染も亀頭部の裏を洗うことである程度予防できるとも言われています。

自分の大切な人を守るため、いや世界平和のために皮をむいて洗うことはとても大切なことです。

真性包茎、嵌頓包茎の人も毎日包皮を可能なかぎり下に下ろすことをくりかえしていると、かなりの確率で自然に皮がむけると言われています。大人になって手術を受けると何 10 万も手術費用がかかります。

仮性包茎は、特に問題はありません。日本人の多くが仮性包茎です。仮性包茎で悩む必要はありません。

繰り返しますが、亀頭部の裏を毎日しっかり洗いましょう。

BOOK GUIDE
今月のブックガイド

うちの娘はAV女優です

アケミン著
幻冬舎
定価1400円＋税

AV女優はもはや普通の職業か？

本書は「親公認」でAVに出演している女優10人のインタビュー集。AV業界用語に「親バレ」という言葉があるくらい、出演する女優にとって、親に仕事がバレることは恐れられている事態である。ところが近年は、娘の仕事を知った上で応援している親が存在するという。著者のアケミンさんは、AVメーカーの広報の仕事を経て、現在はAVレビューを中心に執筆活動をしているフリーライターの女性だ。脱いではいない彼女でさえ、AV業界で働いていることに親は否定的な態度をとる。そんな個人的な事情からも「親公認AV女優」に関心をもち、「親バレ」の経緯や親子関係についてインタビューした内容がまとめられている。

本書の帯には「AV女優は、親も応援する普通の職業になったのだ」とある。しかし、この文言は少々誇張表現だろう。周囲の人やネットからバレたり、自分から告白したり、娘がAV女優になったことを親が知った経緯はさまざまだが、すぐに仕事に理解を示す親は少数だ。家族会議で感情をぶつけ合った修羅場の末にようやく応援に転じる、仕事を理解はできないが娘は娘として受け入れる、父はあっさり認めてくれたが母は激怒、性風俗等で不特定多数の素人を相手にするよりは安心と賛成する……。

何より、このインタビュー恒例の質問「自分の娘がAV女優になりたいと言ったらどうする？」に対する回答が、AV女優という仕事を、やはり「普通の職業」とまでは言い切れない側面を物語っている。「大賛成！」「ぜひ勧めたい！」という人は一人もいない。みんな、「うーん、私の立場では反対はできないけど…」といった微妙な態度を見せている。その理由として女優たちは、裸になる仕事への社会の偏見や、決して楽な仕事ではないことなどを口にしているが、AV業界そのものが法律ギリギリ、あるいはグレーゾーンにあるかもしれないことも諸手を挙げて賛成できない理由なのではないだろうか。

2015年にAVへの出演を拒否した女性を所属プロダクションが訴えた事件、2016年にNPO法人ヒューマンライツ・ナウが「強要されるアダルトビデオ撮影　ポルノ・アダルトビデオ産業が生み出す、女性・少女に対する人権侵害」と題した調査報告書を発表したことなどを契機に、AV出演強要被害の問題が広く知られるようになった。以降、メーカーや女優、男優が逮捕される事態が続いている。AV業界の当事者たちからは、悪徳メーカーや被害はごく一部であるといった声が上がったり、業界の健全化を目指す団体が立ち上げられたりしているが、全体から見れば少数でも被害があるのは事実である。それは放置されていい問題ではない。AV出演強要被害の実態は『AV出演を強要された彼女たち』（ちくま新書・宮本節子著）に典型的な事例や契約書の問題点等が記されている。

しかし、だからといってAVを悪と決めつけ、規制を厳しくすればいいというものでもないだろう。本書に登場する女優たちの中には、「AVは天職」ときっぱり語る女性、AV女優に憧れて自らAV出演を希望した女性もいる。成人女性の自己決定権のもとに納得して、さらには楽しんで仕事をしている場合、AV出演は悪いことであると言えるだろうか？

著者のアケミンさんも、出演者ではないものの、AVに魅了され、自らAV業界に飛び込んでいる。もはやAVは男性の性欲のためだけにあるのではなく、性を楽しむ大人の娯楽の一つとなっている。AV出演が親にも認められる「普通の職業」か否かはともかく、少なくとも、その時々の時代の空気によって、権力が違法と合法との線引きを曖昧にずらしているような現状は、きな臭く望ましくない。

（日本性科学連合事務局長　今福貴子）

研究会、研修会等の情報を下記まで、郵送または、
Fax03-5800-0478でお寄せください。
〒112-0002　文京区小石川2-3-23春日尚学ビル B1
日本性教育協会「JASE ジャーナル」係

▶▶ 4月29日（土）～4月30日（日） ◀◀

セックスワーカーのための
アドボケーター養成講座

セックスワーカーが抱える問題は、社会的な差別・偏見による生きにくさ、労働問題、貧困や暴力や性感染症など多岐に渡っています。一つの専門性だけでは支援が困難なセックスワーカーに対し、どう支援したらいいのか悩んでいる支援者の方に対し、これまでの蓄積を元に、今回の研修会を企画しました。

講座内容

1日目（10：00～17：00）
「なぜ『性』は語りにくいのか？」「セックスワークをめぐる法その歴史と現在」「セックスワーカーをめぐる法体系と暴力防止アプローチ～国際編 ～」「ゲイ男性向け風俗店の現状と課題」「セックスワーカーとは誰のことか？」ほか

2日目（10：00～18：30）
「セックスワーカーのセクシュアルヘルスとメンタルヘルス」「合意とは何か～性が暴力となる時～」「セックスワーカーの労働相談と犯罪被害」「セックスワークと表現」
【シンポジウム】「それぞれの現場から見えてくるもの～どう連携するか」

会　場　東大本郷キャンパス（文京区本郷 7-3-1）

参加費・問い合わせ等　受講料：30,000 円　定員：50 名（定員になり次第締切）。
申込専用ページ：http://swash-rcnet.peatix.com/　　問い合わせ：mail.swash@gmail.com

対象：対人支援・相談員、カウンセラー、医療・福祉・保健・教育・防犯等関係者、行政官、政治家、研究者、弁護士、ジャーナリスト、アーティスト、風俗店店長・従業員、出版関係者、学生等、性風俗で働く人々の支援に関心のある方。
共催：SWASH、レイプクライシスネットワーク（RC-NET）　　後援：特定非営利活動法人 アジア女性資料センター

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

資料室利用方法

【閲　覧】必ず事前に電話で予約が必要です（tel 03-6801-9307）。貸出業務は行っておりません。
【開室日・時間】月～金曜日 10：30～17：30
【休室日】土・日曜日、祝日、年末年始　※この他、会議等で臨時に休室することがあります。
【コピーサービス】コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚 10 円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。
http://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html

収集文献・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイアモンド文庫、ほか。
http://www3.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi